



## 熊野神社長床

長床ながとこは、熊野神社の拜殿で九間×四間の、茅葺き寄棟造りの建物である。直径一尺五寸（45・4cm）の円柱四本が、等間隔（十尺 $\parallel$ 303cm）に五列に並んでおり、全部吹抜けになっている。また外回り一間通りが化粧屋根裏のひさしの間の間として区切るように並べてある。中央の桁行七間、梁間二間のところは、天井を張った身舎みやとなっている。各柱の上には、平三斗の組物ひらみつとが乗り、中備なかまをには間斗束いとづかを用いている。

長床の建築年代は明らかでないが、その様式は、藤原時代の貴族の住宅建築として知られる寝殿造りの主殿の形式をふんだもので、鎌倉初期はくだらないものといわれている。

慶長十六年（一六一一）の大地震で倒壊したあと、同十九年に再建されたが、地震で折れた旧材をそのまま使用したため、柱を短かくしたり、柱と柱の間隔を縮めたり、平三斗や間斗束などの組物をなくしたりしたため、創建時よりも一回り小さいものとなった。

その後何回かの修理をおこなったが、傷みがひどいため、昭和四十六年から四十九年にかけて解体修理をおこない、創建時の長床が復元され、鎌倉時代の遺構として、東北地方では他に類を見ないものとなった。

所在地 慶徳町新宮字熊野 熊野神社

指定年月日 昭和三十八年七月一日

